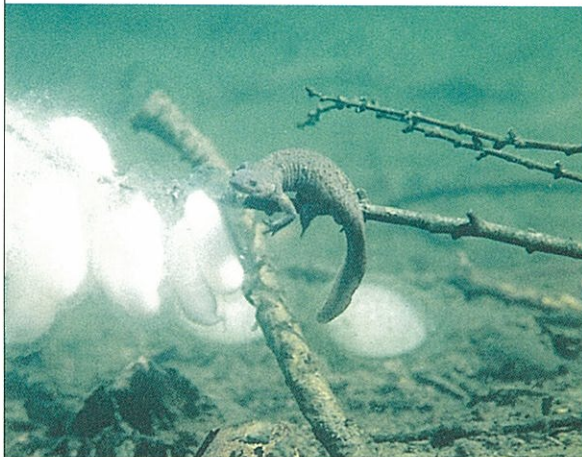


サンショウウオ目サンショウウオ科

クロサンショウウオ

青森県：C

環境庁：該当なし



大八木昭撮影

下北半島を除く各地に生息していますが、八甲田山地より西側に多く分布しています。産卵期に、多数の個体が水のきれいな池沼に集まって、数百ほどの卵塊を産みつけることがあります。戸和田山や八甲田大岳などがよく知られています。

ふ化したおたまじゃくしは小動物を食べて生長し、多くは秋までに変態し陸上の生活を始めますが、そのまま冬をこす個体もあります。池沼の環境が悪化し、親の生活の場である湿潤な林床をもつ森林が少なくなり減少が目立ちます。

奈良

④汽水・淡水魚類

《概要》

大河川のほかに、中小の河川が多数あること、また十和田湖、小川原湖、十三湖をはじめとした天然の湖沼はもちろん、多数の溜め池があることが本県の特徴です。本来、本県は多様な淡水魚の生息地として好適な条件を備えていたと言えますでしょう。

本県に自然分布する淡水魚類相の特徴としては、純淡水魚類の種数が少なく、海とのつながりを持つ魚が比較的多いことがあげられます。本県を自然分布の北限とする魚種は、「純淡水魚には分類されないが一生を淡水中で送る種」であるメダカを付け加えても8種にすぎず、しかも種ごとに生息する水系は異なります。生物地理上の境界線としての津軽海峡（ブラキストン線）の意義は、純淡水魚に関する限り大きくないといえることができます。

現在における青森県の淡水魚類相の大きな特徴は、移入種の多さです。オイカワ、カマツカなどをはじめ、現在、普通に見られる魚種のうちかなりのものが、これに該当します。元来生息していた魚種にこれらの移入が与えた影響は明らかではありませんが、モツゴがシナイモツゴに壊滅的な影響を与えることを除いては、深刻な問題を引き起こすことはなかったように思われます。このことは、近年になって生じてきた、外来性の魚食魚、つまりオオクチバスや、今後分布拡大が心配されるブルーギル、コクチバスなどが引き起こす深刻な問題とは対照的です。

現在、県内の淡水魚類の生息を脅かしている要因はいくつかに分けて考えることができます。第一に、上に述べたオオクチバスによる食害です。これによって食害を受けるのは、主には溜め池などにすむ小型魚であり、深刻な例としてタナゴ類やシナイモツゴがあげられます。今後さらに、ブルーギルやコクチバスが広がってくれば、在来魚種への害はいつそうひどくなると考えられます。

第二に、生息環境の悪化ですが、これはさらにいくつかの要因に分けられます。まず、上に述べたタナゴ類やシナイモツゴの場合、溜め池の埋め立てやゴミの不法投棄などによって生息地そのものが悪化・消滅しつつあります。メダカの場合は、水田の水管理のあり方の変化、つまり水路のコンクリート化、水田と水路との落差を大きくすることなどと並んで、溜め池の消滅や環境悪化が脅威の一つとなっています。

一方、河川の魚類の場合、現在その生存に脅威となっているのは河川の改修や人工構造物の構築です。例えば、河川内を移動する魚種にとっては落差工などの設置は致命的な打撃になりえます。このように、魚の生活史に必須なすみばや通り道を奪うという直接的な脅威に加えて、水源を涵養する森林や、魚にとっての隠れ家やえさを供給する河畔林が健全であるかどうかという、より大きなスケールの問題があります。

今後の保護にむけての課題は、第一に、オオクチバスなど外来性魚食魚の分布拡大阻止と駆除とが必要で、場合によっては、安全なすみばへの緊急避難的な移植も考慮する必要があるでしょう。また、休耕田や既存の溜め池などを利用したビオトープの創出も視野に入れることが求められます。河川の魚類の場合、新たな改修に際して、生物に配慮した方法を採用することはもちろんですが、さらに、現在すでに設置されている堰堤や落差工、あるいはコンクリート護岸などについても見直し、可能なものは自然に近いものに変更すべきでしょう。

サケ目サケ科

イトウ

青森県：E X

環境庁：絶滅危惧ⅠB類



松宮隆志撮影

日本最大の淡水魚で、成長すると1mを超えることもあります。かつて本県でも自然繁殖し、小川原湖では漁獲の対象でしたが、現在では絶滅しています。現在、国内では北海道の東部・北部に分布しますが、近年減少しています。海に降りますが、降りても沿岸にとどまります。動物食で、特に魚を食べます。繁殖期は春で、平瀬にメスが産卵床を掘って産卵を行います。なお、現在県内では人工養殖されています。

佐原

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

スナヤツメ

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



向山満撮影

全長20cmほどで吸盤状の口を持ち、あごを持ちません。幼生は成魚と異なり、眼がなく、口も吸盤状ではない。繁殖期を除いては多数が一度に捕獲されることはほとんどありません。国内では北海道から九州にまで分布します。海には降りません。幼生は夜行性で、泥中の有機物を食べます。幼生は汚染のない河川の泥底・砂泥底れぎすいにすむが、産卵場所は礫底であり、生存にはこれらの場所が揃っていることが必要です。

佐原

ニシン目ニシン科

ニシン

青森県：L P（尾駮沼系群ニシン）

環境庁：該当なし



新野大撮影

佐原

ニシンはイワシに似るが斑紋がなく、左右に平たい体型をしています。本系群を含めて、湖沼に入って繁殖するニシンはそれぞれに地域性が強いことが知られています。尾駮沼系群は尾駮沼で産卵し、北海道の太平洋側でえさをとりながら回遊します。冬に尾駮沼に遡上して、藻類などに産卵します。ある程度以上に成長した個体はアミ類など小型無脊椎動物や小魚などを食べます。

サケ目サケ科

サクラマス（通称スギノコ）

青森県：L P（大畑川の陸封型サクラマス）

環境庁：該当なし



青森県内水面水産試験場撮影

佐原

サクラマスとヤマメは同じ種に属し、河川にとどまるものをヤマメといえます。通常のヤマメに比べ本個体群には、青緑色を帯びた体色などいくつかの違いが認められます。大畑川の上流の一部にのみ生息しますが、ここにはアメマス（エゾイワナ）が分布しています。動物食で、水生昆虫や陸上からの落下昆虫を食べます。繁殖は9から10月で、産卵・放精は砂礫底部で雌雄1対で行います。

コイ目コイ科

シナイモツゴ

青森県：A

環境庁：絶滅危惧ⅠB類



下：婚姻色が出た雄

佐原雄二撮影

佐原

最大でも全長8cm程度の小魚です。モツゴに似るが、すんぐりした体型で、側線が不完全です。繁殖期の雄は体色が黒くなります。日本固有種で、かつては関東から東北各地に分布していたが、関東ではすでに絶滅しました。本県では青森平野にのみ生息しています。昼行性で雑食性です。産卵は石など固いものの表面に行く。本種の減少は、モツゴとの交雑、外来性魚食魚による捕食、溜め池の環境悪化によるものです。

コイ目コイ科

ヤリタナゴ

青森県：A

環境庁：該当なし



竹内史宗撮影

佐原

最大でも全長10cm程度の小魚です。繁殖期の雄は体の前半部が赤みを帯び、尻びれの縁も赤くなる一方、腹面は黒くなります。国内では南九州と北海道を除く各地に分布しますが、本県では津軽平野のみに分布します。主に河川下流や溜め池などにすんでいます。産卵は二枚貝の中に行います。雑食性で付着藻類や小型の水生動物を食べます。タナゴと同じく、オオクチバスによる捕食が本種の危機を招いています。

コイ目コイ科

タナゴ

青森県：A

環境庁：準絶滅危惧



向山満撮影

佐原

最大でも全長10cm程度の小魚で、タナゴの仲間としては体高が低い。繁殖期の雄は腹が黒く、尻びれの縁は白く彩られます。日本固有種で、関東以北の本州太平洋側にのみ分布し、本県は分布北限です。雌は産卵管を用いて二枚貝のえらに卵を産み付け、仔魚はしばらく貝の中で生活します。付着藻類や小型底生動物を食う雑食性です。近年、オオクチバス（通称ブラックバス）の溜め池への移入が深刻な悪影響を及ぼしています。

コイ目コイ科

アブラハヤ

青森県：LP（大和沢川の透明鱗アブラハヤ）

環境庁：該当なし



松宮隆志撮影

佐原

アブラハヤは最大でも10数cm程度の小魚です。うろこが細かく、体表がぬるぬるしており、体を縦に走る1本の縞が顕著です。群れでいる性質が強い。本県は国内北限ですが生息河川では珍しいものではありません。しかし、大和沢川にすむ多くの個体は通常とは異なり、体表の黒色色素が少なく、えらぶたからは鰓の赤い色が透けて見えます。行動や生態が通常の個体と異なっているのかどうかは不明です。

コイ目コイ科

ウグイ

青森県：L P（宇曽利山湖の耐酸性ウグイ）

環境庁：該当なし



大八木昭撮影

ウグイは水質に関して適応範囲が広い魚で、酸性の水中にすむこともあります。宇曽利山湖は強い酸性の湖で、このように極端な条件で生活する魚はほかに例がなく、貴重な事例といえます。とくに本個体群の特徴として、骨質の発達が悪いこと、またえらの塩類細胞がよく発達していることがあげられます。ウグイはほぼ国内全域に分布しますが、本個体群は宇曽利山湖のみに生息し、繁殖のさいには流入河川を遡ります。

佐原

ナマズ目ギギ科

ギバチ

青森県：A

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



向山満撮影

全長では20cmを越えます。ナマズに似ますが、背びれや尾びれがよく発達し、あぶらびれも顕著です。日本固有種で、本県を分布北限とし、関東・北陸にまで分布します。水のきれいな河川の主に中流域にすみ、夜行性で昼間は物陰にひそみ、夜間に出て水生昆虫などを食べます。県内での生息は馬淵川水系の中流域に限られます。本種の生存を脅かすのは河川改修と水質悪化です。

佐原

メダカ目メダカ科

メダカ

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



佐原雄二撮影

佐原

全長4cm程度の小魚。体色は褐色で、背の黒い縦すじが上から見ると目立ちます。国内では本州から沖縄まで分布し、本県は自然分布北限です。水路・溜め池などが主要生息地で、河川中・下流部の流れのゆるいところにも住みます。雌は水草などに卵を産み付けます。雑食性だがどちらかといえば植物食にかたよる。本種の減少は、水路のコンクリート化など、水田を取り巻く状況変化が大きいといえます。

トゲウオ目トゲウオ科

イトヨ（イトヨ降海型）

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



巣作り中の雄（婚姻色が出ている）

東信行撮影

佐原

全長8cm程度。背びれの前に3本、腹びれに1対のとげがあります。繁殖期の雄は背や眼が青く、腹部は鮮やかな赤色になります。本種には一生を淡水中で過ごすものと、海で生活し繁殖のために河川に上がるものがあります。繁殖のさいは、河川に上ってきた雄が流れのゆるい場所でなわばりを持ち、砂底に植物片を集め、粘液でくっつけあわせて巣を作ります。雄が卵を守り、孵化したのち稚魚は海に降ります。

トゲウオ目トゲウオ科

トミヨ及びイバラトミヨ

青森県：B

環境庁：該当なし



イバラトミヨ

向山満撮影

佐原

いずれも全長で5cm程度。背にはのこぎりの歯状のトゲが並びます。体側には鱗板があるが、連続して完全か（トミヨ）、不完全であるか（イバラトミヨ）が異なります。繁殖期には雄の体色は黒くなります。おもな生息地は、平地の中または山地の裾にある、湧水をもつ池沼や、水がきれいで流れのゆるい河川です。どちらも動物食で、水生昆虫や小型甲殻類などを食べます。繁殖期には雄が植物片を集めて巣を作ります。

スズキ目ハゼ科

シロウオ

青森県：C

環境庁：準絶滅危惧



松宮隆志撮影

佐原

全長約5cmの細長い小魚。ハゼ科の魚としては特異な形態で、第一背びれを欠き、うろこもなく、半透明の体にうきぶくろが透けて見えます。北海道南部から鹿児島県まで分布する。沿岸を群れで泳ぎ、産卵のために河川を遡上します。県内各地のシロウオ漁は5月ごろの風物詩となっています。産卵は下流域の、伏流水のある砂底の礫下に行い、雄が卵を孵化まで保護します。孵化後には雌雄ともに寿命を終えます。

スズキ目ハゼ科

チチブ

青森県：D

環境庁：該当なし



岩手県産

竹内基撮影

全長で10cm足らずで、頭部が大きくずんぐりとした体型です。体の割に眼が小さい。体色は褐色から黒色。第一背びれの棘条が伸びています。暗色の縞模様があり、頭部には白い小斑が多数あります。本県が国内分布の北限ですが、生息実態は不明です。小型魚類や底生動物、藻類を食べます。石の下や空き缶などを利用して産卵し、卵を雄が保護します。なお、本県の河口部や溜め池には近縁種のヌマチチブが広く生息しています。

佐原

カサゴ目カジカ科

ハナカジカ

青森県：A

環境庁：絶滅のおそれのある地域個体群（東北地方）



向山満撮影

最大では全長で15cmほど。カジカとは異なり、腹びれに数本の縞が顕著です。北海道のほぼ全域と、北東北の一部河川とに分布します。海へは降りません。本県では馬淵川の特定の支流の上流部にのみ生息しています。分布が限られているうえ、個体密度も高くありません。きれいな流れの石礫底にすみ、水生昆虫など動物質のえさをとります。本種の生存を脅すのは河川改修です。

佐原